

フィールドスタディー(平成26年.春) 古代・中世の東国史を学ぶ

平成26年度大東文化大学春期オープンカレッジ(東松山校舎)

# 古代・中世武蔵国の職人たち

—職人のふるさとを訪ねて—

引率講師：宮瀧 交二 先生(講座講師)

☆日時	平成26年7月1日(火) ※雨天決行
》集合場所	◎第一集合地 東松山校舎・管理棟前駐車場9:00集合 ◎第二集合地 東上線高坂駅西口朝日興産前9:10集合 ※フィールドスタディーの参加・不参加、及び集合地を6月24日(火)までにご提出ください。 (当日不参加になった場合は必ずセンターにご連絡ください。)
》昼食場所	関越自動車道高坂サービスエリアを予定しております。
》日程(予定)	9:00東松山校舎出発→9:10高坂駅出発→大賀菟糸館→高坂SA(昼食)

→下里割谷板碑石材採掘遺跡→埼玉伝統工芸会館→高坂駅（17：00）→大東文化大学東松山校舎

※集合地で埼玉伝統工芸会館入館料200円と紙すき体験料840円（合計1,040円）を集合します。お釣りのないようにお持ちください。（入館料は団体料金になっています。）

※道路状況ほかにより到着時間が予定時間通り行かない場合があります。予めご了承ください。

》同行

中野 泰彦、高田 綾（地域連携センター）

》観光バス

東榮観光

★通常の講座とは時間が異なります。ご注意ください。

## 大東文化大学東松山地域連携センター

電話：0493-31-1534



## 大賀藕糸館

ここが町田市にある大賀藕糸館



「社会福祉法人まちだ育成会 町田市大賀藕糸館」とある



校倉造風の建物になっている



館内には障害のある方による大賀ハスと紅花を中心とした手作りの製品やお菓子を販売する売店がある/ここで藕絲について説明を聞く



大賀郎博士に捧ぐ

はすの実に

いのちを  
かけし

学究の

夢

ここにあらん

大賀

藕絲館

一九九〇年二月

町田市長 大下勝正

町田市 社会福祉法人 まちだ育成会

# 大賀 藕絲館

1951年、製大賀一田博士が特許した二千種類のハスの実が結実し、世界的に有名になった大賀ハス。大賀藕絲館はその大賀ハスを材料とした様々な商品があるため、町田市に誇る観光地です。

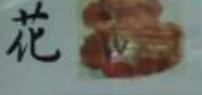


蓮

大賀藕絲館といえば、蓮の花と葉は生花として販売し、種、葉、葉托は、様々な加工品に加工されています。



蓮葉には紅花が収穫され、生花の販売はもちろん、資料作りから染色まで行っています。写真下「紅花葉（はなもち）」



花



銘々

町田市の名産品「銘々」の製作は、蓮の皮を押しつぶし、約3ヶ月かけて丁寧に乾燥させて乾燥させます。



織物

蓮の繊維（芯）を使った「和紙織」のほか、アクリル糸や綿糸を自由な形で作ったバッグ、コースター、ハンカチなどがあります。

わりめんを使用した蓮の実の手玉、各種刺繍、自家製の紙吹雪など、すべて手縫い、手作業で製作しています。



織物

蓮の繊維や紅花を織り込んだ、地にはない色と質感を感じてください。ほろろ、しおれ、刺繍、染物、刺繍袋など。

町田市産業観光物産情報誌

ごみ袋販売中!!

種類	数量	価格
二重	5	250円
単重	10	140円
単重	20	220円
単重	40	420円

## 町田藕絲織・香袋

藕絲織は、ハスの葉から採出したクモの糸のように細い糸を紡いで織った布で、天保の時代に江戸厚さ中野屋が、ハス布で香包を織り、奈良県の当麻寺に奉還した「当麻重信」が残す最古の藕絲織といわれています。

藕絲織は、古来より貴重なものとされ、主に仏教信仰の対象として、各地に伊弉所産されています。

大賀ハスから採取した藕絲を何本も撚り合わせ、270度染色した後、縦糸に絹糸を張り、横糸に藕絲で織り上げた藕絲織が出来ました。香は平安時代から伝承されている汗明散を使用しています。

香袋には、約2gの藕絲が入り、これに必要ハスの葉は30~40kgです。



庭園には蓮が植えられていた





障害福祉サービス事業（就労継続支援B型）  
おおがくうしかん



町田市 大賀藕絲館



## 大賀ハスについて

1951年(昭和26年)、故大賀一郎博士の指導のもとに、千葉県検見川遺跡から二千年昔のハスの実が三個発見されました。

大賀博士の努力により、そのうち一個だけが翌年開花したことから、「大賀ハス」として一躍世界的に有名になりました。

大賀ハスは、町田市内でも栽培され、ハスの実、茎、葉、果托などが大賀藕絲館の製品の材料になっています。



## 藕絲とは

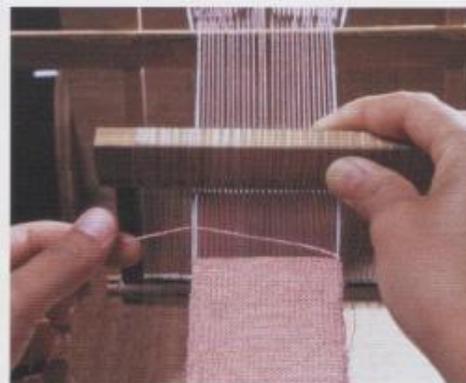
ハスの茎から抜き出したクモの糸のような細い糸です。これを紡いで織ったものが「藕絲織」です。



●藕絲織=香袋

## 藕絲織の由来

天平時代の中将姫が當麻寺に寄進されたと伝えられる當麻曼陀羅が、最古の藕絲織として現存しています。町田市では、古来からの染料である紅花で染色した藕絲織を使って「香袋」を制作し「町田藕絲織」と名付けました。



## 大賀藕絲館の作業

香袋をはじめ、ハスの実を使ったお手玉や根付、果托から作る蓮座のほか、蓮紙、茄糸織などを制作する仕事に利用者が従事しています。

織りや紙漉き、お手玉・蓮座の制作などの室内作業と、ハスの茎や果托・実の採集、紅花摘みなどの屋外作業を、利用者の障がいに応じ行っています。

さて、これは奈良県葛城市に所在する当麻寺/正面は本堂(曼荼羅堂)、左手は金堂、右手は講堂/ここに蓮糸に纏わる伝説がある



それが中将姫伝説で姫は一夜にして蓮茎から蓮糸曼荼羅を織り上げたという

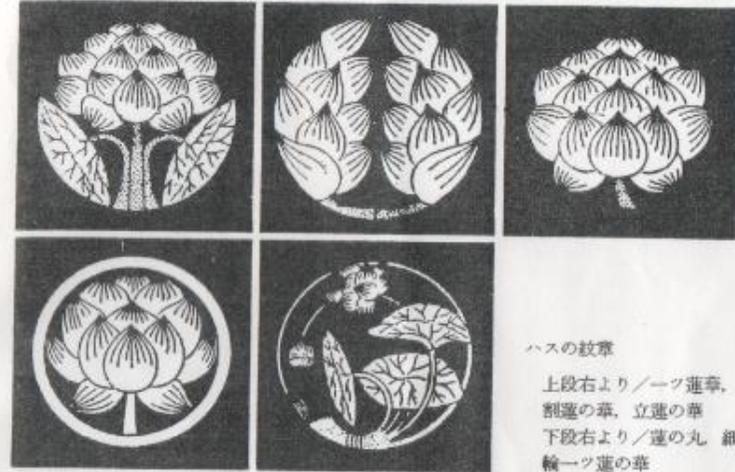
## 中 将 姫

中将姫は、奈良時代の右大臣藤原豊成公の娘で、幼くして母を失い、継母に育てられました。しかし、継母から嫌われ、ひばり山に捨てられてしまいました。その後、父と再会し一度は都に戻りましたが、姫の願いにより當麻寺へ入り、称讃浄土経の一千巻の写経を達成し、十七歳で中将法如として仏門に入り曼荼羅(諸仏の悟りの境地を描いた絵図)を織ることを決意し、百駄の蓮茎を集めて蓮糸を繰り、これを井戸にひたすと糸は五色に染まりました。そしてその蓮糸を、一夜にして一丈五尺(約四メートル四方)もの蓮糸曼荼羅に織り上げました。姫が二十九歳の春、雲間から一条の光明とともに、阿弥陀如来を始めとする二十五菩薩が来迎され、姫は、西方極楽浄土へ向かわれたと伝えられています。「練供養」は、その伝承を再現したもので、毎年五月十四日に當麻寺において行われています。



中 将 姫





ハスの紋章  
 上段右より/一ツ蓮華、  
 割莖の華、立蓮の華  
 下段右より/蓮の丸、細  
 輪一ツ蓮の華

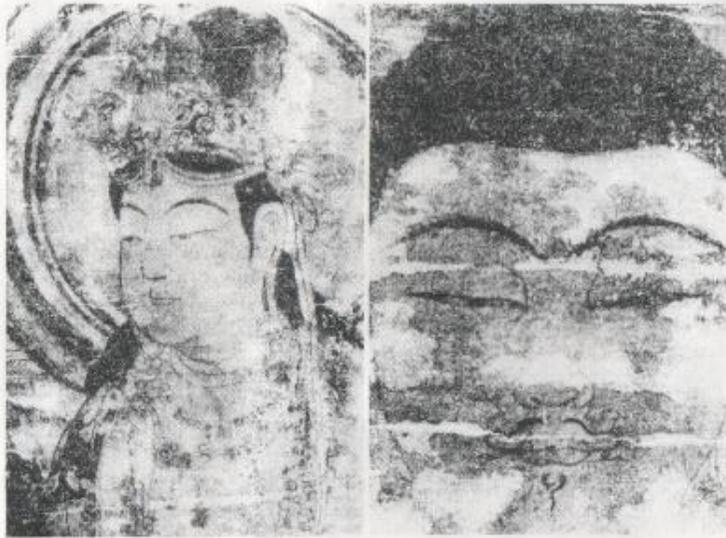
紋章

家紋は植物、動物等を図案化したもので、その氏を表象するものになっているが、ハスは一般に用いられず、専ら寺院の独占物とされてきた。

藕糸織

比の世より蓮の糸に結ばはれ西に心のひく我が身かな  
 わが国でいう蓮糸（はすのいと）を中国では一般に「藕糸」とか「荷糸」と呼称している。藕というのはもと「爾雅」によればレンコンをいうのであるが、ハス全体を藕とも、荷とも、芙蓉ともいっている。わが国では蓮（実のこと）をハスとして、平安時代あたりから全体を指していうようになっていく。  
 藕糸は古くから人の目についたようで、インドの『マハーバラタ』には「レンコン、藕糸を売る」と出ているから、紀元前四世紀頃から織維として価値があ

ったようである。中国でも屈原の『離騷』の中に「菱ト荷ノ葉敷ツテ衣トシ」とあり、崔祐は「藕糸ヲ袖イデ衣ト為ス」として、この織維を用いたことがあらわされている。また杜甫は「公子氷水ヲ調、佳人藕糸ヲ雪」と書いている。貴族間でも夏期に氷を食べる事は容易でなく、非常に贅沢なものであったらしいが、美人でもハス糸で織った着物をつけることは容易でなかったとし、藕糸織を最上のもものとして貴んだことがわかる。陸遊は「細腰美人藕糸裳」などとして最美の女性の姿としている。  
 しかし、これらは実際には、ほとんど絹糸の美称として用いられたものようである。また思い切れない繻綿たる情緒を表現する場合の比喩として、『法華玄義』にある「思惑漸断藕糸ノ如シ」とか、孟郊の「妾心藕中ノ糸、断ツト雖ドモ藕蓮華」のごとき形容は枚挙にいとまないほどである。  
 試みにレンコンや莖を折ると、その切り口から無数の糸が出てくる。ハスの莖（レンコンを含む）には維管束があつて、その道管の壁がらせん状の織維からなっている。この織維が解けてくり出されてくるのである。各々、無数の一本の織維にみえるが、顕微鏡でみると、これらは三、四から二〇条の織維な無色の糸からなっている。一本のレンコンの横断面をみると、肉眼で見える道管が二―三〇〇個あるから、実に数千本の織維な糸が集まって一本のハス糸をつくることができる。  
 手取り早く採ろうとするならば、地上の莖に五―一〇センチの間隔で浅く傷を入れ、そこより折って両手でひねって左右に引き出せば、折れ口より六〇センチの長さの糸が出てくる。これを燃りあわせ順次つなぎ合わせて長い糸にすればよい。大賀博士の実験によれば、「一匁（約三・八グラム）」を採るに葉柄二、三十匁（約七五―一三キログラム）を用意しなければならない。この二、三十匁の葉柄を採るに

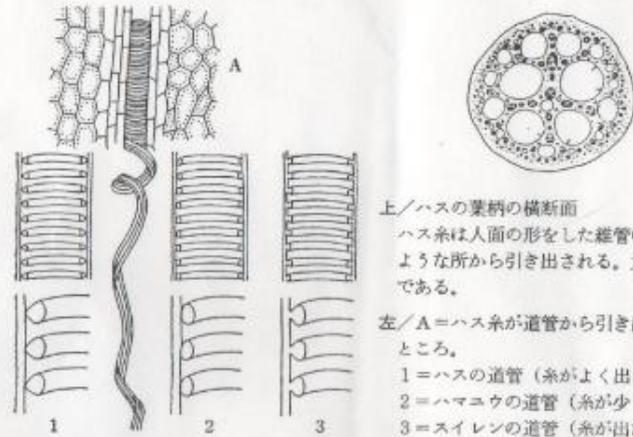


観音菩薩の赤外線写真  
(冠は金糸が入っている)

当麻曼荼羅の阿彌陀仏

当麻曼荼羅、清海曼荼羅、智光曼荼羅も縁起によれば藕糸織となつてゐるが、清海、智光は焼失しており、当麻曼荼羅だけが現在し、当麻寺奥深く秘蔵されてゐる。この縁起を引用してみる。

「天平宝字七年六月十五日横領の大臣の娘が当麻寺に入つて剃髪し、生身の弥陀を見奉らずば伽藍を出でじとの念願を起し、勅を奉じ近江の課役として、九十余畝の蓮茎を集め、これより糸を採り出し、染井を獨つて五色に染め、化女の援助をかりて、同年六月二十三日朝、方一丈五の浄土変相を現出した大曼荼羅を織り上げた。」というのである。一六歳の少女が短期間のうちにこのような大きな織物を織りあげるといふことはとうてい不可能なことだし、またこれに要するハス



上/ハスの葉柄の横断面  
ハス糸は人面の形をした維管中の目や口のような所から引き出される。大孔は通気口である。

左/A=ハス糸が道管から引き出されているところ。

- 1=ハスの道管 (糸がよく出る)
- 2=ハマユウの道管 (糸が少し出る)
- 3=スイレンの道管 (糸が出ない)

は水田約一畝(約九〇平方メートル)の面積を必要とする。即ち一町歩(約九九二平方メートル)より百匁(約三七五グラム)の糸を採り得る」としてゐる。なお採糸の時期は八月中旬、地下茎が太くなつた後でなくてはならない。それ以前であるとハスの同化作用がなくなり、栄養不良になり、地下茎の発育を害し、秋になつても満足なレンコンができなくなるからである。だから、葉の枯れてしまふ一月上旬までの二、三ヶ月が適期である。

藕糸織 藕糸織といわれるものが現在各寺院や在家に秘蔵されてゐるが、いずれも仏教信仰から出たものである。しかし藕糸織といつても絹織物の場合が多く、真偽の確かでないものが多いとされてゐる。

わが国における藕糸織説話の最初に、推古朝三一年(六三三)に新羅国より達率奈末智が来朝して、藕糸で織つた都率曼荼羅を献じたと、『日本書紀』に記されてゐる。おそらくトソツ天宮の華麗さを織つたものであつたらうが、焼失して今はないのでその真偽はわからない。また、

## 下里割谷板碑石材採掘遺跡

しもさとわりや

ここから小川町下里に所在する下里・青山板碑製作遺跡の割谷地区(国指定史跡に指定される予定)にアプローチする



傍には割谷川が流れる



この先が下里・青山板碑製作遺跡の割谷地区/ここから先は車は通行止めになっている



下里・青山板碑製作遺跡/割谷地区



少し歩くと行先表示が立っている



ここを右手に山に入って行く





登る道筋には、このように緑泥石片岩のカケラが散在している/上の採掘場から雨で流されたものという



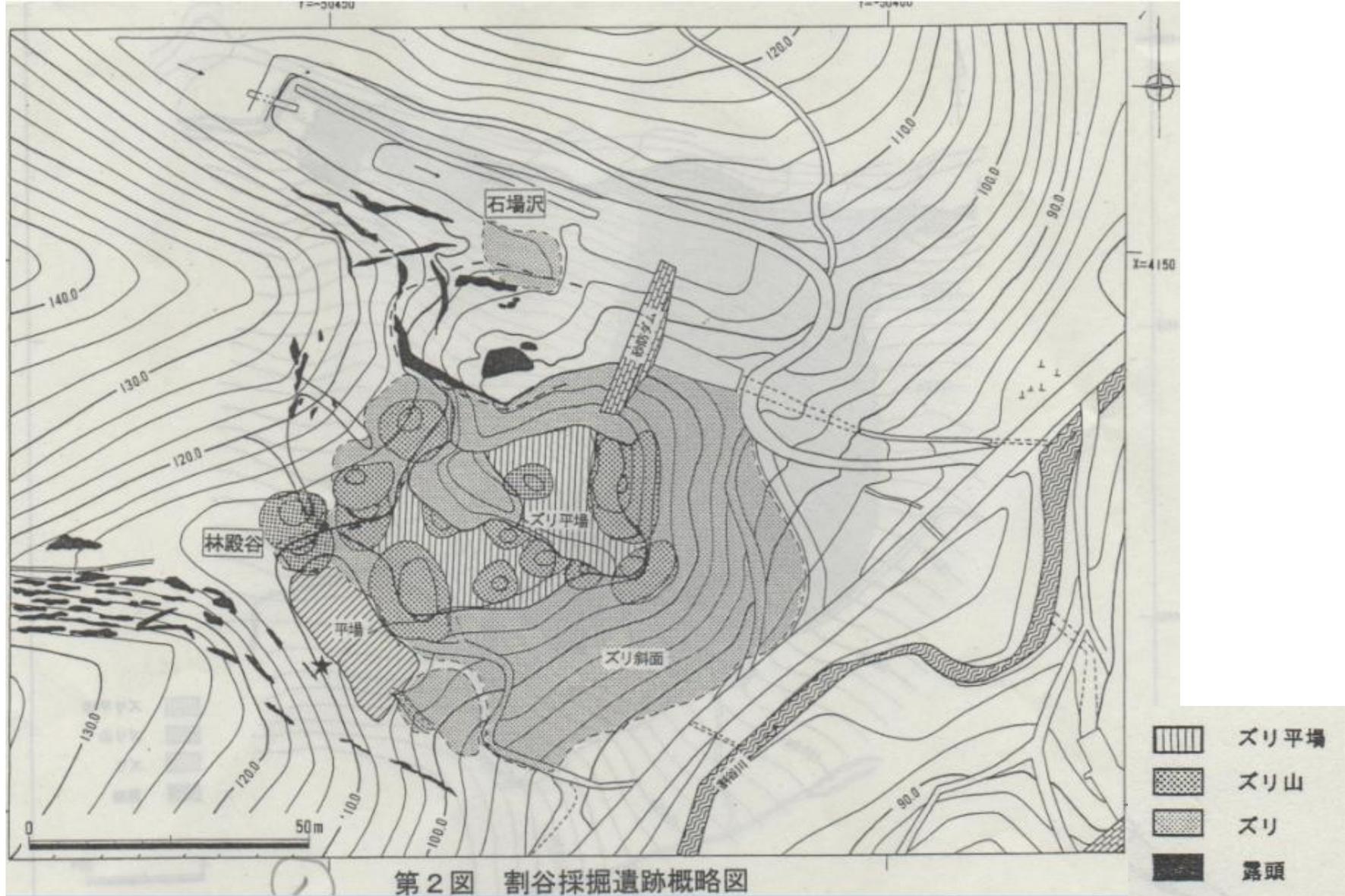
右手一帯は緑泥石片岩のカケラに覆い尽くされている/前方の斜面でトレンチによる発掘調査が行われたという



アップで見たところ



割谷地区の採掘遺跡概略図/右下に割谷川が流れ、そこから左上へ道を登って来た「平場」と記された辺りから見たところ



前方のトラロープが張られた辺りがトレンチによる発掘調査が行われた場所



トレンチ(1T)の部分はゴムシートで覆われていた



更に右手にも、もう一つトレンチ(2T)の跡がある(ゴムシートの部分)



左上の1T、2Tがトレンチの場所を示す



振り返って見たところ/発掘についての説明が行われている/ここでは石材採掘から粗加工した板碑未成品(一次製品)及び台石の製作と供給が営まれていたという



トレンチ(1T)を見たところ



その右上を見上げたところ/この辺りに緑泥石片岩の露頭があり、原石を採り出していたという



振り返って斜面下方向を見たところ/この辺りは採り出した原石の一次加工が行われたエリアとされる



左手を見ると一段下がっているところに平場があり、ここは一次加工の際に出たカケラ等不要材(ズリ)を集積したところという



これは緑泥石片岩の露頭から採り出されたばかりの原石の色合い/時間が経つにつれて変色し、通常の緑色になっていくという



これが緑泥石片岩の露頭



これは採掘する際に生じた溝状の掘り込みの残る石材



近くには緑泥石片岩を使った墓石(板碑)があった



しもざと あおやまいたびせいさくいせき  
「下里・青山板碑製作遺跡」

## 新たに国指定史跡に！

国の文化審議会（会長：宮田亮平）は、平成26年6月20日（金）に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、小川町の「下里・青山板碑製作遺跡」を国指定史跡に指定するよう文部科学大臣に答申しました。

この結果、官報告示の後に、国指定史跡に指定される予定です。埼玉県における国指定史跡は19件、小川町に主体的に所在する国史跡の指定は初めてとなります。

### 1 下里・青山板碑製作遺跡について

(1) 員数 1

(2) 所在の場所 比企郡小川町大字下里字林殿谷 他

比企郡小川町大字下里字西坂下前

比企郡小川町大字下里字内寒沢

(3) 指定面積 55,222.85 m<sup>2</sup>

## 2 下里・青山板碑製作遺跡の特徴

### (1) 下里・青山板碑製作遺跡の概要

鎌倉時代から戦国時代にかけて関東に広く流通した武蔵型板碑<sup>むさしがたいたび</sup>の製作遺跡です。発掘調査により、採掘から一次加工までの工程が行われていたことが確認されました。武蔵国だけでも5万基にも及ぶ緑泥石片岩<sup>りょくでいせきへんがん</sup>製の板碑<sup>いたび</sup>が存在しますが、その中心的な製作地と考えられ、中世の流通や精神文化を知る上で貴重な遺跡です。

### (2) 下里・青山板碑製作遺跡の特徴

外秩父山地の北東裾に当たる小川盆地に所在する遺跡です。13世紀頃から、関東では板碑の製作が盛んになります。小川町は、板碑石材の有力な産出地と考えられており、平成13年に同町下里で、加工石材が採集されたことを契機に、小川町教育委員会が調査を開始したところ、採掘の可能性のある地点が、割谷地区<sup>わりや</sup>、西坂下前A地区<sup>にしきかしたまえ</sup>、内寒沢地区<sup>うちかんざわ</sup>など、19か所確認されました。

割谷地区では、緑泥石片岩の露頭や、大小のズリ（緑泥石片岩の不用石材の集積）によって形成された幅50メートル、奥行き45メートルの平場が認められます。発掘調査では矢穴痕<sup>やあなあと</sup>（「ヤ」という石を割り取るための工具によって、岩に穴が開けられ

た痕跡)が残る岩塊、溝状の掘り込みの残る石材、平ノミによる削り痕が残る石材等が確認され、採掘から板碑形へ加工するまでの工程が明らかになりました。

また、出土した未成品の大きさや加工技術を、小川町内外にある板碑と比較検討した結果、割谷地区における採掘の最盛期が、関東で最も多く板碑が造られたとされる14世紀中頃から15世紀後半であることが明らかになりました。

### (3) 下里・青山板碑製作遺跡の評価

遺跡の規模や採掘の可能性がある地区が多数確認されることから、小川町内で生産された板碑の量は膨大で、武蔵国における板碑の中心的な生産地であったと考えられます。板碑の生産と流通だけではなく、板碑に象徴される中世の精神文化を知る上でも重要な遺跡です。

正面は現在まで緑泥石片岩の採掘がおこなわれていた採掘所



正面の岩肌が露出しているところが別な角度から見た採掘所



ここから左手に見たところで、中央やや左手が先ほど見て来た下里割谷板碑石材採掘遺跡





大東文化大学オープンカレッジ/平成26年春期講座/古代・中世の東国史を学ぶ/フィールドスタディー-職人のふるさとを訪ねて- 資料より

## 埼玉伝統工芸会館

ここが小川町小川にある埼玉伝統工芸会館



右手に小川和紙のモニュメントが立っている





## 小川和紙の歴史

日本に製紙技術を伝えたのは、高麗人の僧、「曇徴」どんしやうである。「日本書紀」に記されています。

そして小川和紙は、一、三〇〇年の歴史があり「武蔵紙」として、正倉院の文書に記録が残されています。

小川町で手漉き和紙が盛んになったのは、原料の楮が自生していることと、恵まれた槻川の清流、そして慈光寺（都幾川村）の写経用に重宝されたことや、江戸という大消費地が近距離であったことなどが要因となったといわれ、最盛期は七五〇軒もの漉き家があり、一大産地を形成していました。今でも、職人の手によって一枚一枚丹念に漉かれる、素朴で強靱な小川和紙は、手漉き和紙の持つ風合いや美しさが、自然に優しい伝統工芸品として見直され、工芸作家など多くの人に愛用されるようになりました。中でも、細川紙は、小川和紙の銘品として昭和五三年に国の「重要無形文化財」に指定され、その名は全国に知られています。

平成十三年八月

小川町・埼玉伝統工芸会館



前方の山はここから見た仙元山/この山の向こう側に上記の下里割谷板碑石材採掘遺跡がある



参考ホームページ

<http://ckk12850.exblog.jp/11672537/>

<http://wind.ap.teacup.com/cb400f/2046.html>

<http://www.pref.saitama.lg.jp/news/page/news140613-00.html>

[http://www.ranzan-shiseki.spec.ed.jp/index.php?page\\_id=224](http://www.ranzan-shiseki.spec.ed.jp/index.php?page_id=224)